

「女子短大生の結婚観について」

沢 津 久 司

I. はじめに

NHKの調査¹⁾によれば、子どもが女の子の場合、受けさせたい教育程度としては短大・高専までが39%、大学までが24%となっており、現実には女子の短大・大学への進学率²⁾は33%で、短大へ21%・大学へ12%と3人に1人が短大または大学に進学している。

この進学率は、彼女たちが生まれた高度経済成長期にあたる昭和30年代(後半)と比較すると約6倍(昭和35年5.5%と比較)となっている。

このように進学率の高い短大について、一般的には「短大の多くは良妻賢母型教育による“花嫁学校”的色彩が強く、旧来よりの通念である“女らしさ”を重視している³⁾」と理解されているようである。

しかし、この80年代は「女性の時代」といわれ、すでに“キャリア・ウーマン”“自立する女”といった言葉も汎濫し、女性の意識と生活の変化が見られ、さらに今後ますます女性の変化をうながす要因⁴⁾も存在している。

そこで、本稿においては、この変化する「女性の時代」である80年代において、「就職」・「結婚」・「出産」・「育児」という人生の重大転期に直面する女子短大生が、現在どのような意識を有しているのかを探究し、併せて今後の教育・研究の一助とするために2年度にわたり行ったアンケート調査の結果について他の資料も交えて考察・報告したい。

II. 調査の概要

1. 調査対象

専門教育科目として「家族関係」が開設されている本学の家政科家政専攻学生を対象とした。

2. 調査方法

4枚にわたるアンケート用紙(自由記述式と一項目選択応答式の質問紙法を併用)を作成・配布し、本人に記述・提出させた。⁵⁾なお、本調査の設問項目・形式・区分等については、辻田アイ・徳田和子氏の用いられたもの(以下辻田調査と略す)を多く採用させていただき、それに独自の項目を追加した。

3. 調査時期

「家族関係」受講の反応・効果等も含めて考察するため、2年度にわたり下記の通り行った。

①短大に入学し、ほぼ1年経過し、「家族関係」を含めて1年次の課程を全て終了した学生

(以下、便宜上2年生と略す)86人……昭和56年2月末(回収率100%)

⑩短大に入学し、6ヶ月経過し、これから「家族関係」を受講する学生
(以下1年生と略す) 89人……昭和56年10月中旬 (回収率93.4%)

Ⅲ. 調査結果の概要と考察

1. 調査対象者の概況 (表1~4)

対象者の出身県等の状況は、表1~4の通りである。この表1~4に基く考察は以下適宜行う。

表1 卒業高校の性別構成

	1年生	2年生
イ. 女子のみ	34 [^] 38.3%	25 [^] 29.1%
ロ. 男女同数ぐらい	23 25.8	22 25.6
ハ. 男子が多い	10 11.2	8 9.3
ニ. 女子が多い	22 24.7	31 36.0
計	89 [^] 100.0%	86 [^] 100.0%

表3 自分を含めたきょうだい数

	1年生	2年生	計
イ. 1人	8 [^] 9.0%	3 [^] 3.5%	11 [^] 6.3%
ロ. 2人	59 66.3	55 64.0	114 65.2
ハ. 3人	18 20.2	26 30.2	44 25.1
ニ. 4人	4 4.5	— —	4 2.3
ホ. 5人	— —	2 2.3	2 1.1
ヘ. 6人以上	— —	— —	— —
計	89 [^] 100.0%	86 [^] 100.0%	175 [^] 100.0%

表2 出身県別構成

	1年生	2年生
イ. 岡山県	43 [^] 48.3%	40 [^] 46.5%
ロ. 広島県	43 48.3	41 47.7
ハ. その他	3 3.4	5 5.8
計	89 [^] 100.0%	86 [^] 100.0%

表4 祖父母との同居年数

	1年生	2年生	計
イ. 同居経験皆無	37 [^] 41.6%	29 [^] 33.7%	66 [^] 37.7%
ロ. 5年未満	5 5.6	12 14.0	17 9.7
ハ. 10年未満	4 4.5	5 5.8	9 5.1
ニ. 10年以上	43 48.3	40 46.5	83 47.5
計	89 [^] 100.0%	86 [^] 100.0%	175 [^] 100.0%

2. 結婚等に対する意識

(1)結婚への意志の有無 (表5)

表5の通り、結婚したいと答えた者は、1年生で91%であるが、2年生は85%とやや低下しており、わからないとする者が増えている。1年次の結婚に対する単なる憧れのなものが、2年次にはやや冷静、現実的になってきたものと思われ、さらに卒業、就職を経れば一層結婚志向は低下するものと予測される。

湯沢調査⁶⁾、辻田調査⁷⁾、総理府調査⁸⁾と年々結婚の希望は低下してきているが、(財)生命保険文化センターの調査によれば、未婚女性の不安事としては、やはり自分の結婚のことが第1位で、以下、別に気にかけていることはないとか、親に万一のことがあるとか、自分の病気・災害・事故のこの順となっている。

表5 将来結婚したいと思いますか、それとも独身で通したいと思いますか

	1本学			2湯沢調査	3辻田調査	4総理府調査	
	1年生	2年生	計	女子短大生	女子短大生	20~24才女子(昭47)	20~24才女子(昭54)
イ 結婚したい	81 [^] 91.0%	73 [^] 84.9%	154 [^] 88.0%	99%	549 [^] 95.5%	77%	70%
ロ 独身で通したい	— —	1 1.2	1 0.6	1	24 4.2	9	12
ハ わからない	8 9.0	12 13.9	20 11.4	—	2 0.3	14	18
計	89 [^] 100.0%	86 [^] 100.0%	175 [^] 100.0%	300 [^] 100%	575 [^] 100.0%	1,109 [^] 100%	231 [^] 100%

※湯沢調査 注6) 昭和44・45年 辻田 注5) 昭和53年 総理府調査 注8) 昭和47年・昭和54年

(2)結婚の年齢 (表6)

平均初婚年齢¹⁰⁾は、昭和53年次は、全国では男子27.6才・女子25.1才、岡山県は男子27.1才・

女子24.4才（全国第5位），広島県は男子27.4才・女子24.7才であり，岡山県・広島県ともに全国平均よりは早婚である。

こういう実態を反映してか，学生はさらに早い23才までに結婚したい者が1年生で87%，2年生で81%もいる。ただし2年生は1年生に比べると，21才以下の比率および24～26才の比率が高い。このことはアメリカのようにカレッジが配偶者獲得の場とまではいかないにしても，ボーイフレンド・恋人・婚約者の有無によって結婚希望も若干早くなったり，遅くなったりといった影響があるものと思われる。

しかし，国勢調査¹²⁾によれば，大学・短大など上級学校への進学率の上昇によって，結婚率は高くなる傾向にあり，20～24才女子の未婚率は，昭和50年の69.2%が昭和55年には77.9%と9%近く高くなってきており，理想と現実はずしも一致しない現状にある。

表6 何歳位の時に結婚したいと考えていますか

	1学年	2学年	計
イ.21才以下	5 ^A 5.6%	11 ^A 13.3%	16 ^A 9.3%
ロ.22才～23才	72 80.9	56 67.4	128 74.4
ハ.24才～26才	9 10.1	13 15.7	22 12.8
ニ.27才～29才	3 3.4	3 3.6	6 3.5
ホ.30才以上	—	—	—
計	89 ^A 100.0%	83 ^A 100.0%	172 ^A 100.0%

表7 何才位ちがう相手を望みますか

	1年生	2年生	計
イ.同じ年	5 ^A 5.6%	5 ^A 5.9%	10 ^A 5.7%
ロ.1～3才	52 58.5	41 48.2	93 53.4
ハ.4～6才	2 2.2	3 3.5	5 2.9
ニ.7～9才	24 27.0	29 34.1	53 30.5
ホ.10才以上	2 2.2	1 1.2	3 1.7
	1 1.1	4 4.7	5 2.9
	—	—	—
	—	—	—
	3 3.4	2 2.4	5 2.9
	—	—	—
計	89 ^A 100.0%	85 ^A 100.0%	174 ^A 100.0%

(3)結婚相手との年齢差（表7）

上述の平均初婚年齢による男女の年齢差は，昭和53年次は，全国で2.5才，岡山県・広島

県はともに2.7才であるが，やはり学生も1年生・2年生ともに1～3才年上の男性を最も希望している。その理由は，話しが合う，友達みたいでおれる，甘えられる，頼れるからといったところであるが，ただ2年生は，見合結婚希望が増えたり，男性の観察眼が養われたりするせいか，さらに4～6才年上の男性あるいは7～9才年上の男性を望む比率も高まっている。厚生省の調査¹³⁾でも，見合結婚の場合は，夫が年上の夫婦が91%と圧倒的に多く，恋愛結婚の場合は，夫が年上の夫婦は70%と21%減り，その分夫婦同年齢あるいは妻が年上のケースが増えることが報告されている。

(4)恋愛結婚か，見合結婚か（表8～11）

恋愛結婚と見合結婚のどちらを希望するかは，その女性の人生観，年齢，育った風土・環境，教育環境，家庭環境（きょうだい数など），恋愛経験の有無，ボーイフレンドや恋人の有無など複雑な要因に左右されるものと思われるが，以下4つの項目を取り上げて考察する。

①学年による結婚方法のちがい（表8）

1年生・2年生とも，最も多いのは恋愛結婚希望で，以下，どちらでもよい，見合結婚の順になったが，ただ2年生は，1年生に比べると恋愛結婚希望が減り，どちらでもよい，見合結婚の希望が増えている。ちなみに読売調査¹⁴⁾（昭和54年3月）では社会人の意識は，どちらでもよいとする者が最も多いが，2年生はその線に近くなってきている。

②出身県による結婚方法のちがい（表9）

岡山県出身者は，1年生と2年生の間にあまり大きな変化は見られないが，広島県出身者は，1年生と2年生で大きな変化が見られ，恋愛結婚希望の最も多い1年生に比べ2年生はその半数となり，逆にどちらでもよいとする者が最も多く1年生の倍近くいる。1年生・2年生の平均では，岡山県出身者と広島県出身者の差はない。上述の読売調査に近くなってきているのは

表8 恋愛結婚, 見合結婚のどちらを望みますか

	1 本 学			2 読充調査
	1 年生	2 年生	計	
イ 見合結婚	5 [^] 5.6%	9 [^] 10.6%	14 [^] 8.0%	14.6%
ロ 恋愛結婚	53 59.6	40 47.1	93 53.5	37.0
ハ どちらでもよい	31 34.8	36 42.3	67 38.5	48.4
計	89 [^] 100.0%	85 [^] 100.0%	174 [^] 100.0%	2156 [^] 100.0%

※読充調査 注14) 昭和54年3月

表9 出身県による結婚方法のちがい

	1 年 生		2 年 生		計	
	岡山県	広島県	岡山県	広島県	岡山県	広島県
イ 見合結婚	3 [^] 7.0%	2 [^] 4.7%	4 [^] 10.3%	5 [^] 12.2%	7 [^] 8.5%	7 [^] 8.3%
ロ 恋愛結婚	21 48.8	29 67.4	21 53.8	14 34.1	42 51.3	43 51.2
ハ どちらでもよい	19 44.2	12 27.9	14 35.9	22 53.7	33 40.2	34 40.5
計	43 [^] 100.0%	43 [^] 100.0%	39 [^] 100.0%	41 [^] 100.0%	82 [^] 100.0%	84 [^] 100.0%

広島県出身2年生である。

①卒業高校の性別構成による結婚方法のちがい (表10)

男子多数高校の出身者は、見合結婚・恋愛結婚希望の両方とも他の高校出身者に比較すると多く、反面どちらでもよいとする者は他の高校出身者に比較して最低となっており、結婚に対する意志が最も明確となっている。男女同数高校出身者や女子多数高校出身者は、見合結婚の希望は低く恋愛結婚希望が50%をこえるものの、どちらでもよいとする者も40%以上あり、結婚方法に対する意志は流動的である。

②自分を含めたきょうだい数による結婚方法のちがい (表11)

1人っ子は、80%以上の者が見合結婚か恋愛結婚希望が明確であるが、2人以上の場合は、恋愛結婚希望が50%をこえるものの、どちらでもよいとする者も30%以上あり、特にきょうだい2人の者は結婚方法に対する意志は流動的である。

表10 卒業高校の性別構成による結婚方法のちがい

	男子多数高	男女同数高	女子多数高	女子高
イ見合結婚	11.1%	4.4%	7.5%	10.3%
ロ恋愛結婚	61.1	55.6	51.0	51.8
ハどちらでもよい	27.8	40.0	41.5	37.9

表11 自分を含めたきょうだい数による結婚方法のちがい

	1 人	2 人	3 人	4人以上
イ見合結婚	2 18.2%	8 [^] 7.0%	4 [^] 9.3%	— [^] %
ロ恋愛結婚	7 63.6	57 50.0	25 58.1	4 66.7
ハどちらでもよい	2 18.2	49 43.0	14 32.6	2 33.3
計	11 [^] 100.0%	114 [^] 100.0%	43 [^] 100.0%	6 [^] 100.0%

(5)結婚相手の職業 (表12)

1年生・2年生ともほぼ同じ傾向で、給与所得者希望が70%と圧倒的に多く、以下、その他、自由業者、自営商工業者の順となっており、この3者の間にはあまり開きはない。辻田調査と比較すると給与所得者の割合が低く、その他・自営商工業者・自由業者の割合が高くなっている。

(6)結婚相手の選択範囲 (表13~14)

同県出身の人を望む者は、1年生の34%から2年生の49%へと急上昇し、結婚相手の選択範囲が狭くなっているのに対し、他県出身の人を望む者は、1年生・2年生ともほぼ同じである。辻田調査と比較すると同県人を望む者は2年生では約10%少ない。

表12 どんな職業の人と結婚したいと思いますか

	1 本 学			2 辻田調査
	1 年生	2 年生	計	
イ給与所得者	62 [^] 69.7%	61 [^] 71.8%	123 [^] 70.7%	478 [^] 87.1%
ロ自由業者	9 10.1	8 9.4	17 9.8	44 8.0
ハ自営商工業者	8 9.0	7 8.2	15 8.6	18 3.3
ニその他	10 11.2	9 10.6	19 10.9	9 1.6
計	89 [^] 100.0%	85 [^] 100.0%	174 [^] 100.0%	549 [^] 100.0%

16) NHKの調査では、岡山県・広島県は郷土意識はやや弱く、鹿児島県は強いと指摘されている。そこで、岡山県・広島県出身者別に再掲すると表14の通りであり、岡山県出身者と広島県出身者の比較では、1年生・2年生とも約20%の開差で広島県出身者が他県出身の人でもよいと開放的である。ただ本学学生の場合は、県民意識等の相違の他、広島県内から岡山市へ通学しているという事情も影響していると考えられる。

表13 どんな範囲の人と結婚したいとしますか

	1 本 学			2 辻田調査
	1 年生	2 年生	計	
イ 親類の人	— — %	— — %	— — %	1 0.2%
ロ 父母の知り合い	1 1.1	— —	1 0.6	13 2.4
ハ 自分の友達のきょうだい	2 2.2	— —	2 1.1	5 0.9
ニ 同県出身の人	30 33.7	42 49.4	72 41.4	321 58.5
ホ 他県出身の人	15 16.9	13 15.3	28 16.1	71 12.9
ヘ その他	41 46.1	30 35.3	71 40.8	138 25.1
計	89 [△] 100.0%	85 [△] 100.0%	174 [△] 100.0%	549 [△] 100.0%

表14 出身県による選択範囲のちがい

	1 年生		2 年生	
	岡山県	広島県	岡山県	広島県
同県出身の人	17 [△] 77.3	12 [△] 57.1	26 [△] 86.7	15 [△] 68.2
他県出身の人	5 22.7	9 42.9	4 13.3	7 31.8

(表13でニ、ホを選んだ岡山県出身と広島県出身の学生を調査)

(7)結婚相手の選択の形態 (表15)

1年生、2年生とも、恋愛感情を最優先させる者が最も多く、以下、長く交際した友人、見合い後の交際となっている。ただ、2年生は、恋愛感情を最優先する者は大幅に減ってきており、長く交際した友人や見合い後の交際を重視する者が増え、「家族関係」受講後「結婚についていろいろな角度からよく考えるようになった」や「慎重になった」との感想とも一致している。

表15 結婚相手を選択する場合どれが望ましいと思いますか

	1 本 学			2 辻田調査
	1 年生	2 年生	計	
イ、見合いの印象	— — %	1 [△] 1.2%	1 [△] 0.6%	— — %
ロ、見合い後の交際	12 13.6	20 23.8	32 18.6	75 13.9
ハ、幼なじみ	— —	2 2.4	2 1.2	4 0.7
ニ、長く交際した友人	23 26.1	27 32.1	50 29.1	182 33.6
ホ、職場の同僚	3 3.4	1 1.2	4 2.3	7 1.3
ヘ、恋愛感情を最優先	50 56.9	33 39.3	83 48.2	273 50.5
計	88 [△] 100.0%	84 [△] 100.0%	172 [△] 100.0%	541 [△] 100.0%

(8)結婚の意志決定 (表16)

結婚は終生の結びつきを目的とするもので(実際は年々離婚は増えているものの)人生の一大事であり、結婚の決定にあたっては、自分一人の気持だけで決定する者は少なく、95%近くの者は「親の意見を聞くが自分が中心」・「親の意見を中心に自分の気持を加える」としている。ちなみに辻田調査では表16の2項の通り殆ど同じであり、湯沢調査¹⁷⁾では「親の意見を中心に自分の気持を加える」者は2%であり変化を生じてきている。

表16 結婚の意志決定はどうしますか

	1 本 学			2 辻田調査	3 湯沢調査
	1 年生	2 年生	計		
イ 自分の気持だけ	4 [△] 4.5%	5 [△] 5.9%	9 [△] 5.2%	13 [△] 2.4%	6 %
ロ 親の意見を聞くが自分が中心	77 86.5	73 85.9	150 86.2	480 87.6	92
ハ 親の意見を中心に自分の気持を加える	8 9.0	7 8.2	15 8.6	50 9.1	2
ニ 親の意見にほぼ従う	— —	— —	— —	5 0.9	—
計	89 [△] 100.0%	85 [△] 100.0%	174 [△] 100.0%	548 [△] 100.0%	300 [△] 100.0%

(9)結婚相手を決定する条件 (表17)

湯沢調査¹⁸⁾によれば、女子短大生が結婚に際し重視するものは、①健康 ②愛情 ③性格 ④遺伝要素 ⑤収入 の順であるが、本学の学生は、1年生は、①健康 ②愛情 ③性格 ④職業 ⑤容姿 の順であり、2年生は、①愛情 ②性格 ③健康 ④職業 ⑤容姿・趣味 の順となっており、職業や容姿・趣味について重視してきている傾向にある。これは辻田調査(ただし愛情、健康は項目として入っていない)による①性格 ②職業 ③趣味と同じである。

逆に重視しない項目としては、1年生、2年生とも①宗教 ②家の格式 ③年齢差 ④親・きょうだいの順となっており、辻田調査の①宗教 ②家の格式 ③年齢差 と同じである。ただし、年齢差については、前述Ⅲ 2(3)と比較した場合、若干矛盾した意識となっている。

全般的に考察すると、2年生の方が1年生よりも各条件を重視する傾向にあるが、これは裏返せば各条件が家庭作りの重要要素であることを理解してきているからであり、それだけに2年生の方が慎重な判断をするのは当然であろう。

なお、この条件重視傾向は、現実には直面すると、さらに変化していくことが表18NHKの調査¹⁹⁾で見られ、理想は高くもちながらも、現実にはそれなりの妥協をしていくことが推測される。ただ、上述(6)の1年生から2年生にかけてみられた同県人であることの重視傾向はNHK調査でもより重視されている。

表17 結婚相手を決定する条件として、相手の下記の事項をどれだけ重視しますか。最も重視するものを3点とし、全然考えないものを0点として、それぞれ3点満点で評価して、その点数を○印で囲んで下さい。(%)

	1 本 学						2 辻田調査 262人 (A短大のみ記載)					
	1 年 生			2 年 生			0			1 2 3		
	0	1	2 3	0	1	2 3	0	1	2 3	0	1	2 3
1. 愛 情	—	—	7.9 92.1	—	—	1.2 98.8	—	—	—	—	—	3.6 96.4
2. 性 格	—	—	10.1 89.9	—	—	1.2 98.8	—	—	—	—	—	3.6 96.4
3. 健 康	—	—	6.7 93.3	—	—	1.2 4.9	—	—	—	—	—	—
4. 職 業	1.1	10.1	49.5 39.3	1.2	6.2	43.2 49.4	0.8	3.6	46.2 49.4	—	—	—
5. 容 姿	2.2	24.7	51.8 21.3	3.7	21.0	45.7 29.6	3.6	34.9	58.2 3.2	—	—	—
6. 趣 味	3.4	30.3	45.0 21.3	—	11.1	60.5 28.4	1.2	12.0	68.3 18.5	—	—	—
7. 財 産	11.2	14.6	54.0 20.2	2.5	21.0	49.3 27.2	7.6	28.1	57.8 6.4	—	—	—
8. 親・きょうだい	11.2	24.7	43.9 20.2	6.2	24.7	48.1 21.0	5.2	25.3	52.2 17.3	—	—	—
9. 年 齢 差	11.2	25.8	46.1 16.9	9.9	27.2	43.1 19.8	10.4	37.4	49.0 3.2	—	—	—
10. 学 歴	6.7	28.1	57.3 7.9	4.9	24.7	50.6 19.8	0.4	9.2	76.3 14.1	—	—	—
11. 家 の 格 式	21.3	30.3	40.5 7.9	19.8	30.9	38.2 11.1	12.0	45.0	39.0 4.0	—	—	—
12. 宗 教	56.2	30.3	9.0 4.5	40.7	39.6	16.0 3.7	27.7	51.0	18.5 2.8	—	—	—

表18 あなたは結婚するとしたら(結婚したとき)、次のいろいろな条件をどの程度重視しますか(重視しましたか) (%)

	1 人 柄		2 取 入	
	A 未婚 348人	B 既婚 112人	A	B
1. 重視する(した)	80.7	63.7	27.3	14.0
2. ある程度重視する	14.3	22.5	64.0	35.6
3. 重視しない(しなかった)	3.1	12.0	5.0	47.7
4. 無回答、その他	1.9	1.9	3.7	2.7

3 親と同居 別居	4 職 業		5 年 齢		6 趣 味	
	A	B	A	B	A	B
26.1	15.9	25.5	23.2	14.9	12.2	11.8 6.0
32.9	18.0	44.7	32.4	57.1	35.0	49.7 22.1
34.8	62.4	26.1	42.1	24.2	49.8	34.8 67.1
6.2	3.7	3.7	2.3	3.7	3.0	3.7 4.8

(10)結婚式の形式 (表19)

1年生では教会を希望する者が多く、2年生では神前を希望する者が多い。ただ式そのものは、本人の希望よりも、親族等の意見にも大きく影響されるもの(NHK調査²⁰⁾では、周囲の人の意見を取り入れて決めたい者が71.4%と圧倒的で、2人だけの考えでという者は17%である)と思われ、理想と現実のギャップがある。

(11)結婚式・披露宴等の費用 (表20)

三和銀行調査²¹⁾によれば、結婚費用は平均664万円で大なる負担(うち妻は338万円負担)となっている。学生の80%近くの者は、親に一部又は全部負担してもらおうと答えており、全部自分たちで負担したいと考えている者は12%である。2年生は経費負担を現実の面から考える者が若干多くなっている。

(12)披露宴・新婚旅行 (表21)

両方とも分相応にという者が、50%以上であるが、新婚旅行はデラックスにしたい者が約20%、両方ともできるだけデラックスにという者が約10%(2年生)~16%(1年生)いる。1年生と2年生ではかなりちがいがみられ、2年生は、デラックス化をさげ、分相応にという者が

7 同県人であること	8 学 歴		9 容 姿		10 家 柄		11 財 産		
	A	B	A	B	A	B	A	B	
11.8	21.1	10.6	10.1	5.6	5.8	2.5	13.8	0.0	4.4
15.5	12.1	47.8	27.0	45.3	33.7	40.4	25.2	22.4	16.6
68.9	64.3	38.5	60.6	—	—	52.8	58.3	74.5	76.3
3.7	2.5	3.1	2.3	2.5	2.3	4.3	2.7	3.1	2.8

※NHK調査 注19) 昭和52年10月

女子短大生の結婚観について

増えている。

(13)新婚旅行 (表22)

1年生は全員が行きたいとしており、日数は10日間を希望する者が多くっており、2年生は1週間が断然多い。

表19 結婚式の形式についてどれを望みますか

	1本 学			2読売調査
	1年生	2年生	計	
イ. 神前	29 [△] 32.6%	47 [△] 55.3%	76 [△] 43.7%	42.5%
ロ. 仏前	5 5.6	— —	5 2.9	2.7
ハ. 教会	43 48.3	27 31.8	70 40.2	2.6
ニ. その他	12 13.5	11 12.9	23 13.2	52.1

※読売調査 注14) 昭和54年3月

表20 結婚式・披露宴等の費用についてどれを望みますか

	1年生	2年生	計
イ. 一部両親に負担してもらう	62 [△] 69.6%	55 [△] 64.7%	117 [△] 67.2%
ロ. 全部両親に負担してもらう	11 12.4	10 11.8	21 12.1
ハ. 全部2人で負担したい	9 10.1	12 14.1	21 12.1
ニ. その他	7 7.9	8 9.4	15 8.6

表21 披露宴と新婚旅行について
どれを望みますか

	1年生	2年生
イ. 披露宴をデラックスにする	2 [△] 2.2%	4 [△] 4.7%
ロ. 新婚旅行をデラックスにする	9 10.1	10 11.8
ハ. 披露宴を切りつめて新婚旅行をデラックスにする	8 9.0	5 5.9
ニ. 新婚旅行を切りつめて披露宴をデラックスにする	2 2.2	— —
ホ. 両方ともできるだけデラックスにする	14 15.8	8 9.4
ヘ. 両方とも分相応にする	47 52.9	54 63.5
ト. 両方ともできるだけ簡素化する	5 5.6	4 4.7
チ. 披露宴を簡素化する	2 2.2	— —
リ. 新婚旅行を簡素化する	— —	— —
	89 [△] 100.0%	85 [△] 100.0%

表22 新婚旅行について

	1年生	2年生
1. 行きたい	89人 100%	84人 98.8%
ロ. 行きたくない	—	—
ハ. どちらでもよい	—	1 1.2
2. 行きたい場合		
イ. 1週間	44 49.5	49 57.6
ロ. 10日間	38 42.7	29 34.1
ハ. 2~3日	5 5.6	1 1.2
ニ. その他	2 2.2	6 7.1
3. 行きたい場合	(どちらか1つ選択)	(両方記入)
イ. 国内	31 [※] 34.8	(略)
ロ. 国外	58 [※] 65.2	(略)

※国外ではヨーロッパ・アメリカが同数、国内では北海道が圧倒的に多い。

(14)希望する子ども数 (表23)

女子の人口再生産率(粗再生産率)は、昭和45年の2.13人から昭和54年には1.79人と低下してきており、²²⁾これを憂える声もある。²³⁾

辻田調査と比較すれば、本調査、朝日調査とも、子ども2人を望む者が増え、3人を望む者は減ってきている。朝日調査の20代前半の女性の意識と、2年生の意識とは殆ど同じである。

自分を含めたきょうだい数のちがいによるものは表23の2項の通りで、1人っ子ときょうだい2人の者は大体同じ傾向であるが、きょうだいが増えるにつれ子どもは2人だけを希望する割合が高くなっている。

表23 子どもは何人位望みますか

	1本 学			2自分を含めたきょうだい数別					3辻田調査	4朝日調査
	1年生	2年生	計	1人	2人	3人	4人	5人		
イ. 1人欲しい	7 [△] 7.9%	4 [△] 4.7%	11 [△] 6.3%	1 [△] 9.1%	10 [△] 8.8%	人 %	人 %	人 %	5 0.9%	1.0%
ロ. 2人	48 54.0	51 60.0	99 57.0	6 54.5	61 53.4	27 62.7	3 75.0	2 100.0	271 49.4	59.0
ハ. 3人	27 30.3	28 32.9	55 31.6	4 36.4	36 31.6	14 32.6	1 25.0	— —	215 39.2	35.0
ニ. 4人	5 5.6	2 2.4	7 4.0	— —	5 4.4	2 4.7	— —	— —	30 5.5	} 4.0
ホ. 5人以上	2 2.2	— —	2 1.1	— —	2 1.8	— —	— —	— —	16 2.9	
ヘ. 望まない	—	—	—	—	—	—	—	—	12 2.2	1.0
計	89 100.0%	85 100.0%	174 100.0%	11 100.0%	114 100.0%	43 100.0%	4 100.0%	2 100.0%	549 100.0%	100.0%

※朝日調査 注25) 昭和56年12月

(15)親との同居・別居 (表24~25)

①学年による同居・別居のちがい (表25の1項)

(財)地域社会研究所の調査では、結婚後、自分の親との同居に比べ相手の親との同居をより避ける傾向がある。(表24)

本学学生は、①(相手または自分の)親と同居を続けたい31% ②子どもが生まれたら(相手または自分の)親と同居26% ③親が老年になり、または身体が不自由になったらその親と同居24% ④どちらの親とも一生同居したくない19% で同居をいとわない傾向にある。ただ、2年生になるとやはり(最初から)同居したい者は減り、子どもが生まれたら同居したいという方へ変化がみられる。辻田調査とは同居時期で大きなちがいがあがる。

①自分を含めたきょうだい数による同居・別居のちがい(表25の2項)

1人っ子は、(相手または自分の)親と同居を続けたい者が64%と圧倒的に多く、同居したくない者は10%に満たない。きょうだい2人以上の者は、各時期に分散しているが、親が老年になり、または身体が不自由になったらその親と同居の者が最も多く、次でどちらの親とも同居したくない者と続いており、同居時期を遅らせたり、嫌う傾向がみられる。

②祖父母との同居経験の有無・長短による同居・別居のちがい(表25の3項)

祖父母と10年以上同居している者は、同居経験のない者に比較すると、親と同居したくない者の割合が減って、(最初から)親と同居を続けたいが増えるなど、親との同居について抵抗感が減っている。

③問題点

上述の(財)地域社会研究所の調査では、親との同居について中学・高校において76%の者が学習したことがないと答えている。今後ますます高齢化社会へととなっていくわけであるから、「家族関係」その他関連科目において同居問題・老人問題等を取上げていく必要がある。

表24 結婚後の親との同居について

	自分の親	相手の親
イ絶対同居はしたくない	2.1%	5.9%
ロ原則として同居はしたくない	31.5	43.7
ハ数年間は同居したくないが、その後は同居してもよい	29.8	42.0
ニ数年間別居した後、できるだけ同居したい	20.2	—
ホ最初からずっと同居したい	14.3	8.4
ヘその他	2.1	—
計	100.0	100.0

※(財)地域社会研究所調査 注25)昭和53年9月

表25 結婚後、親と同居して暮らしたいと思いますか

	学	
	1年生	2年生
イ、相手の親と同居を続けたい	18 [^] 20.7%	14 [^] 16.5
ロ、自分の親と同居を続けたい	12 13.8	10 11.8
ハ、子が生まれたら相手の親と同居	12 13.8	15 17.6
ニ、子が生まれたら自分の親と同居	8 9.2	9 10.6
ホ、親が老年になり、または身体が不自由になったらその親と同居	20 23.0	21 24.7
ヘ、どちらの親とも一生同居したくない	17 19.5	16 18.8
計	87 [^] 100.0%	85 [^] 100.0%

(下表へ続く)

(16)職業の継続(表26)

未婚女性が働く際に重視する条件としては、①個性や能力に合うこと ②収入の安定 ③人間関係が好みに合う ④収入の多さ ⑤通勤時間が短い の順となっているが、そのようにして就職しても、いづれ結婚・出産等で退職する者も多い。

計	2自分を含めたきょうだい数別		3祖父母との同居経験別		4辻田調査
	1人	2人以上	同居経験皆無	10年以上同居	
32 [^] 18.6%	3 [^] 27.3%	29 [^] 18.0%	9 [^] 13.8%	17 [^] 21.0%	58 [^] 10.6%
22 12.8	4 36.3	18 11.2	8 12.3	12 14.8	26 4.8
27 15.7	— —	27 16.8	10 15.4	13 16.0	35 6.5
17 9.9	— —	17 10.6	6 9.2	7 8.6	16 2.9
41 23.8	3 27.3	38 23.5	16 24.6	20 24.8	354 63.1
33 19.2	1 9.1	32 19.9	16 24.6	12 14.8	66 12.1
172 [^] 100.0%	11 [^] 100.0%	161 [^] 100.0%	65 [^] 100.0%	81 [^] 100.0%	545 [^] 100.0%

1年生と2年生を比較すると、1年生の方がやや家庭派であるが、平均すると約60%の者は結婚するまでに退職したいとしている。辻田調査とは約15%のちがいがある。

一方、企業側の意向は、結婚するときはできるだけ退職してほしいとするものが38%となっており、²⁷⁾ 大体2年生の意識(39.5%)と一致している。また、企業の実態調査では、結婚に際して²⁸⁾ たいてい退職する46%、出産に際してたいてい退職する41%となっており、学生の意識と

大差はない。ただ就職している未婚女性の ①結婚したら退職する30% ②子どもができるまで働き続ける37% ③結婚するしないにかかわらずずっと働き続ける33% というキャリア志向の増えた最新の意識とはかなりのちがいがあ

表26 短大卒業後職業はいつまで続けたいと思いますか

	1 本 学			2 辻田調査	3 日経調査
	1 年生	2 年生	計		
イ. 1～2年程度	7 ^人 8.0%	14 ^人 16.3%	21 ^人 12.1%	12 ^人 2.1%	
ロ. 結婚するまで	50 57.5	34 39.5	84 48.6	256 44.7	30.2%
ハ. 子どもができるまで	7 8.0	16 18.6	23 13.3	175 30.5	36.5%
ニ. 子どもができて働ける限り続ける	23 26.4	21 24.4	44 25.4	101 17.6	32.5% 結婚しないにかかわらずずっと仕事を続ける
ホ. 結婚しても子どもをつくらずに働き続ける	— —	— —	— —	5 0.9	
ヘ. 結婚しないで働き続けたい	— —	1 1.2	1 0.6	24 4.2	
計	87 ^人 100.0%	86 ^人 100.0%	173 ^人 100.0%	573 ^人 100.0%	

※日経調査 注29) 昭56年11月

Ⅳ. ま と め

以上のように、学生の意識には、一般社会人の意識に類似した部分と、そうでない部分とがあったわけであるが、学生の間でも約6ヶ月の間に1年生と2年生の間では結婚の意識等に変化やちがいがみられることは上述の通りである。

- (1). 1年生の特徴を最大公約数的にまとめると次のようになろう。(個別的要因は考察外)

入学して6カ月経過し、夏休みも過ぎて短大生活にもやや慣れてきたけれども、結婚・就職等については先輩ほどの現実感はない。

結婚については、断然22～23才の頃、できれば同県出身の話しの合う1～3才年上の健康なサラリーマンと恋愛・交際し、相手の愛情や性格等を重視し、他の条件も考えたうえで、親と相談して(恋愛)結婚することにしたい。分相応な結婚式にしたいが、できれば教会で式を挙げたいし、新婚旅行はヨーロッパかアメリカに10日間程度行きたいので、多少デラックスになっても仕方がない。費用は親に負担してもらいたい。結婚を期に仕事をやめるが、場合によってはもっと続けてもよい。子どもは2～3人でよく、親との同居は嫌いではないので最初から親と同居してもよいが、なるべく遅い方がよい。

- (2). 2年生の特徴を最大公約数的にまとめると次のようになろう。(個別的要因は考察外)

入学して1年近く経過し、やや結婚への憧れはさめたものの、できれば22～23才の頃、同県出身の1～6才年上の健康なサラリーマンと、見合でも恋愛でもいいから慎重に長く交際して、相手の性格や愛情等を重視し他の条件も考えたうえで、(好きになったら)親と相談して結婚することにしたい。神前結婚でもよいが、新婚旅行にウエイトをおきつつ、あくまで分相応な結婚式を挙げあまり親には負担をかけたくない。結婚を機に仕事をやめたいが、できればもっと続けたい。子どもは2～3人でよく、親との同居は嫌いではないが、なるべく遅い方がよい。

㊦「家族関係」の授業は、テキスト・関連新聞記事・関連文献等を用いて行ったが、受講した2年生について調査したところ、受講により結婚意識等が変った者50%、あまり変らなかった者40%、全く変らなかった者10%であった。

以上のように1年生と2年生では結婚意識等のちがいがみられ、2年生は、長い学園生活の

いよいよ最後であるという自覚、学友会活動・クラブ活動・下級生の指導等学園生活における最高責任者であるという自覚による意識・変化に加えて、アルバイトその他の社会体験の深まり、友人・ボーイフレンド・恋人等とのつき合い、「家族関係」などの専門教育・一般教育等授業の影響、卒業・就職期の接近等種々の要因により、結婚・就職等について視野広く自覚をもって真険に考えるようになり、慎重・冷静・現実的になってきたものと思われる。

したがって教育面での対策としては、この間の指導を適切に行うこと（たとえば授業科目の構成・学年別配当、講義内容等の検討・充実など）が大切であり、それによる教育効果も期待できる。

結婚等についてこのような希望をもった彼女たちが、これから実社会に出て結婚・出産・育児等に直面するわけであり、種々の要因によりその意識と生活にさらに変化を生じていくものと思われるが、女性にとって大事なことは、“やさしさ”“すなおさ”“明るさ”“誠実さ”であるというのが一般庶民の声³¹⁾であり、彼女たちの調和のとれたなお一層の成長を願う次第である。

本稿執筆の企画に際し、結婚意識等に関するマスコミ各社の調査報告・関連文献・各短大紀要等に当たったが、設問の項目・区分・形式等が不統一のため相互利用に難点のあることが判明した。本稿では最も詳細・具体的な辻田アイ・徳田和子氏の調査・研究と同一の項目・区分・形式等を多く採用させていただき、それに独自の項目を追加した。

最後に、快く資料の提供・閲覧にご協力いただいた関係各位に感謝の意を表します。

(昭和57年1月10日)

参 考 文 献 等

- 注1) NHK放送世論調査所 「日本人の意識1978」 昭和53年6月
- 2) 文部省 「学校基本調査」 昭和55年5月1日現在
- 3) (財)生命保険文化センター 「女性の生活の現在と将来」 昭和56年9月 75頁
- 4) 注3) に同じ 1頁
具体的には、①平均寿命の伸び
②子ども数の減少及び子育て期間の短縮
③電化による家事合理化や家事代替サービスの普及
④戦後生れ人口の増加
⑤高学歴女性の増加
⑥OL経験者の増加
⑦第3次産業の成長等による女性の就業機会の増加
- 5) 辻田アイ・徳田和子 「女子短大生の結婚観について」 鹿児島純心女子短期大学研究紀要第10号 1980年
- 6) 湯沢雅彦 「図説 家族問題」 日本放送出版協会 昭和48年 67頁
- 7) 注5) に同じ 鹿児島市内3短大女子学生575人対象
- 8) 総理府 「婦人に関する世論調査」
- 9) 注3) に同じ 174頁
- 10) 厚生省 「人口動態統計」
- 11) 上子武次・増田光吉編 「日本人の家族関係」 有斐閣 昭和56年6月 42頁
- 12) 総理府 「国勢調査」
- 13) 厚生省 「人口動態社会経済面調査・婚姻」 昭和48年
- 14) 読売新聞社 「読売全国世論調査」 昭和54年3月 2,156人対象
- 15) その原因としては、たとえば産業構造比率が、第2次・第3次産業構造は岡山県86.6%、広島県90.4%、鹿児島県75.7%と違う(昭和55年国勢調査) ことなどが考えられる。
- 16) NHK放送世論調査所 「全国県民意識調査」 昭和53年8月
- 17) 注6) に同じ 昭和44年・45年調査
- 18) 注17) に同じ
- 19) NHK放送世論調査所 「日本の夫婦像」 昭和52年11月

女子短大生の結婚観について

- 20) 注19) に同じ
- 21) 読売新聞 昭和56年9月23日 「結婚……最近の傾向」
- 22) 総理府 「日本の統計」 昭和56年
- 23) 日本経済新聞 昭和55年11月19日 「避けたい1人っ子」
- 24) 朝日新聞 昭和57年1月3日 「第4回定期国民意識調査」 20代前半の女性170人対象
- 25) (財)地域社会研究所 「同居問題アンケート」 昭和53年9月 東京都・神奈川県所在の大学3校・短大1校の2・3年男女537人調査
- 26) 注3) に同じ 177頁他
- 27) 注3) に同じ 103頁他 「企業人アンケート」
- 28) 注3) に同じ 343頁他 「企業人アンケート」
- 29) 日本経済新聞 昭和57年1月7日 「働く独身女性の意識調査」
- 30) 注16) に同じ 32,421人対象